生麦事件の碑

幕末の政治が急展開

key.

［　薩摩藩　英人観光客　英米医師団　］

ガイド

鶴見区生麦１丁目16－４

京急生麦駅より徒歩15分、キリン横浜ビアレッジ入口左隣
JR鶴見駅東口より無料バスもある

「生麦事件の碑」は、明治16年12月８日、鶴見の人・黒川荘三氏によって、英国人リチャードソン落命の地に私費で建てられた。戦後は、横浜市地域史跡として市教育委員会が保存している。碑文には『西国立志篇』で有名な中村敬宇の作った古詩体の荘重な文が刻まれている。（碑文と訳文については、綱渕謙錠著『空白の歴史』平６・文芸春秋社発行、を参照して下さい。）

文久２年（1862）８月21日（西歴で９月14日）、江戸城に乗りこみ、幕政改革の朝命を伝えた後、江戸をたった薩摩藩島津久光の総勢4百人余人の行列は、東海道川崎宿から神奈川をめざして進み、午後２時頃生麦村（漁村だが天領）にさしかかったとき、前方から英国人を乗せた４頭の馬がやってきた。

一行は先頭からレノックス・リチャードソン（上海在住商人）、ボラデール夫人（香港商人の妻）、マーシャル（夫人義弟）、クラーク（エー・ハード商会）の４人で、川崎大師の見物に向かう途中であった。日本語が理解できず制止する藩士の隊列の中に馬が入りこみ、薬丸示顕流の達人・奈良原喜左衛門がリチャードソンに切りつけた。他の藩士も3人の英国人を襲撃した。この3人は傷を負いながらも神奈川に逃げ、米国領事館本覚寺で、英国公使館付医師ジェンキンスや米国宣教医のヘボン等の手当てをうけた。だがリチャードソンは落馬して鮮血を落としつつも十町余り逃げて倒れ、とどめを刺された。命をうけ生麦に急行した英国公使館付医師のW・ウイリスは意に反し検屍役をつとめることとなってしまった。

早速、イギリス代理公使ニールは、幕府に謝罪と賠償金を要求した。９ヶ月後幕府は賠償金を支払ったが、薩摩は支払わず薩英戦争に至った。話がこじれたのは、リチャードソンにとどめが刺された事実による。薩摩藩は楽に死なせてやったと云いはったためである。この事件と戦争を通じて薩摩藩は開国論に傾き、以後両者は急速に接近し、幕末の歴史は急転回し、近代日本を迎えるに至った。

［荒井保男］

蛇も蚊も祭り

東海道の疫病除け

key.

[　生麦神明社　蛇も蚊も祭り　疫病除け　]

ガイド

鶴見区生麦３－13－７ 神明公園

京急生麦駅よりキリンビール方面へ徒歩10分
またはJR鶴見線国道駅より旧東海道を徒歩15分

「蛇も蚊も祭り」で有名な神明社の隣にできた新公園に、砂場を囲むようにして「蛇も蚊も祭り」の主役である大蛇をタイル貼りで造形した飾りつけを作り、ここの特徴とした。（写真）しかし祭りの拠点は隣の神明社である。

この祭りは生麦に伝わる独特な伝統行事で、約300年前に悪病が流行した際に、萱で作った蛇体に悪霊を封じこめて海に流したことに始まる。現在は6月の第1日曜に盛大に行われる。

名前の如く、祭りの主役はヘビ。毎年、地元の人々が神明社境内で、丹念に萱を束ねて荒縄で結び、貝殻で作った目玉をつけて完成する。

全長300mもある巨大なヘビを２匹作る。

頭の重い部分を大人がもち、尾の部分を子供が持ち、“蛇も蚊も出たケ、出たケー、出たケー、日よりの雨ケー、雨ケー、雨ケー”と言いながら町中を練り歩く。家の前にくると、戸口から頭をつっこみ、“ソイヤッ、ソイヤッ”の掛け声に合わせてヘビがのたうちまわる。これでは大抵の疫病神は逃げてしまうであろう。

町中を練り歩いたあと、二匹のヘビは神社に戻り、ヘビ同士の壮烈な戦いをして祭りは終るのである。　［荒井保男］

○『関口日記』に書かれた生麦の疫病

生麦の名主の書いた日記に登場する病気をあげると次の如くである。

文久2年7月から9月まで14人の麻疹患者が数えられ、「親父大病之所当節麻疹大流行」の記事が見られる。

また痢病、下痢、吐瀉、食傷、疫症が20例、かくらん、おこりなどの熱病も約20例みられる。その他、明治15年7月から9月の記事を読むと、「本年はコレラ病各地に流行致し其故是迄延引…」と書かれている。

痢病や下痢の中にコレラが入っていたかも知れない。　［大滝紀雄］

生麦の『関口日記』

医療記事にも言及

key.

[名主　私的日記　医療記事]

ガイド

鶴見区生麦3の5付近

京急生麦駅下車、徒歩８分で旧東海道へで、川崎方面へ左折してほどなく関口家に達する
旧家屋はなく非公開

『関口日記』は、武州橘樹郡生麦村の名主が4代にわたって代々書き記した日記で、現在残っているのは、文化３年（1806）から明治34年（1901）に至る約1世紀の間、ほとんど休みなしに綴られた87冊の日記帳である。

昭和46年にその『第１巻（文化３－同８年）』が活字で刊行され、昭和58年までに全26巻が遂次発刊された。

この日記には、毎日の天候や地震、火事、村の生活模様などが克明に記述されている。

関口日記には数十人の医師が登場してくるが、弘化4年ごろから明治期に至るまでの間が医家との交際が深く、頻繁にでてくる医師に小嶋雄章（のちの将監）がいる。彼は関口家のホームドクターであり、両家の交流は深い。

明治の初めは、人力車での往診がみられたが明治5年に新橋横浜間に鉄道が開通し、鶴見駅が開業。交通は便利となり、浅田宗伯が横浜に来たとか、患者が野毛の病院の西洋医セメンズの診察を受けたとか、患者が東京の佐藤病院（順天堂医院）に入院したとかの記事がみられる。

文政9年4月13日、甲子、快晴「今朝阿蘭陀人帰ル」の記事がある。『シーボルト江戸参府紀行』を調べてみると次の記事を見出した。

“すばらしい晴天に恵まれて、我々は朝6時過ぎ川崎をあとにし、入江と新緑の燃える近郊の美しい景色に見とれる。鶴見や生麦の村々では、去年のナシの実をうまく保存して売っていた。（斉藤信訳、東洋文庫）”

この他、種痘の記事が安政５年（1858）に出てくる。この年、モーニッケの牛痘痂が江戸のお玉ケ池種痘所（東大医学部の前身）で接種された。早速、生麦でも行われ、注目すべきは、天然痘にかかった時の民俗行事（見舞方法、酒湯、赤飯祝など）を、そっくり牛痘接種児にも行った事実である。如何に危険視していたかが理解できよう。　　［大滝紀雄］

（本写真は横浜開港資料館所蔵の原本より転写したものである。）

鶴見の鶴居堂

名物“苦楽丸”

key.

[名物薬店　旧東海道　苦楽丸]

ガイド

鶴見区鶴見中央４－２－14

JR鶴見駅東口下車、徒歩３分
又は京急京浜鶴見駅下車、徒歩１分

現在の鶴見区のほぼ中央を、JRや京急の電車が南北に走っている。現代ではこれに沿うように旧東海道が通りぬけており、鶴見東口駅前通りとベルロード鶴見という商店街が構成されている。昔の町の中心はベルロードの方だ。

江戸時代は、天領であったが川崎宿と神奈川宿の間にあって、間の宿（アイノシユク）であったから、行商人とか博労（牛馬の商人）が泊まる宿しかなかった。従って大した商売をする家もなく、文政6年（1823）の人口約650人で、街道の東側はすぐ海であった。

この小さな宿場の北端近くに、サボテン屋という茶店があった。道からウチワサボテンの樹がみえることが珍らしく、旅人のひと休みに絶好の茶店であった。その隣に筆、墨、紙を売っている四郎左衛門の店があった。

寛政11年（1799）に、鶴見村の名主・佐久間権蔵が代官所に提出した明細帳には、「小商い」四郎左衛門と認めてある。それが文政13年（1829）の明細帳では、“痰煉薬、筆、墨…”と続いている。この30年の間に、製薬業が加わったのである。

年次のことははっきりしないが、四郎左衛門が伊勢講に当たりお伊勢詣りをした。不幸なことに、梅雨期なのに喘息様の気管支炎となり、やっとの思いで内宮の宿についた。相部屋の客に金沢の薬屋がおり、丸薬をわけてくれた上、薬の処方まで教わって鶴見に帰ってこれた。あれほどの苦しみを楽にしてくれたお薬を、自分だけの利用では申し訳ないと四郎左衛門は考え、製薬業をはじめたのである。そして鶴見の痰切り薬として次第に海道筋の名物となっていった。

代がかわって、店の名をつけようということになった。先代が鶴見に帰ってきたとき、庭に鶴が立っていたという話に因んで〈鶴居堂〉と名づけた。ときに文化10年（1812）年11月15日のことで、家伝妙薬“苦楽丸”と名づけた。これの処方は“桔梗根末４匁、南天実末１匁に甘草、オーバコ、やつで、防風、樟脳を加えて白蜜で煉り丸薬とする”である。

鶴居堂は昭和12年頃まで続いたが、いまその跡は、文房具店「まるはち」となり、同ビル内に中西医院が同居している。（写真）　［中西淳朗］

市場村・畑の灸

疳の虫に良効

key.

[　鶴見市場　一里塚　名物灸　]

ガイド

鶴見区市場西中町６－23

京急鶴見市場下車、熊野神社側にで、旧東海道を左折し200m余で一里塚その前の畑医院が旧跡地
非公開

東海道・川崎宿と神奈川宿との“間の宿”である鶴見村は、米作を主とする農村であった。

『鶴見村誌』（竹内治利、佐久間道夫共著）に、幕末の鶴見村職業構成表がのっている。

これをみると、痰練薬の製造販売業が１軒（鶴居堂）のみである。ではどうしたのだろう。

“医者などもほかの仕事の片手間におこなった人は、かなりあったのではないか。”と書かれている。（例えば、百姓医者岩村友益）

化政期の生麦村では、初代の関口藤右衛門が名主をつとめながら医師の役目もはたしている。

このように名主や地主で医術の心得があった人がいた。磯子の堤磯右衛門もその１人だ。

鶴見の北東で鶴見川を渡った川崎側の市場村には、地主で灸をすえる家が幕末から戦前期にかけて、市場村一里塚の前にあった。（写真）“畑の灸”と呼ばれて、子供の疳の虫に効き目があったと伝えられている。

東海道筋で有名な灸といえば、円海山清浄院護念寺の“峯の灸”である。もし川崎の人がこの寺に行くとすると、東海道保土ヶ谷宿の近くの明倫高校の脇から、「これより円海山道」という道しるべに従い、３里ほどの山道を登らねばならない。

市場村の一里塚の前の“畑の灸”なら近くて手取り早いということで、かなり遠くより灸をすえに来たそうである。市場村の専念寺も円海山の護念寺も共に浄土宗であるので、何らかの結びつきが考えられる。（この点未調査）

“峯の灸”は幕末になって江戸落語の「強情灸」に登場するほど有名で、“打膿法”というくり返し点灸する方法である。

灸は、血のめぐりを良くし筋肉をやわらげ、内臓を刺激して機能を調節する作用がある。特に“打膿法”では、体内の白血球の働きを向上させ、身体の抵抗力を増進させるので、季節をえらんで灸をするのは良いと昔から云われ、三越の三井では、元禄以前から灸を年中行事としてとり上げ、保健につとめていたほどである。

［中西淳朗］

久志本左京家の墓域

2千石の侍医ねむる

key.

[常倫寺　久志本常勝　鶴見駒岡]

ガイド

鶴見区駒岡394

JR鶴見駅東口下車、市バス一の瀬行15分、駒岡十字路下車徒歩5分又は東急東横線綱島駅下車、綱島街道へで駒岡まわり日吉駅東口行東急バスで10分、旭変電所前下車3分
所在は照光山常倫寺本堂うら

久志本氏は、伊勢国度会郡久志本（今の皇学館大学や神宮文庫のあるところ）の出身で、元は外宮の神官で祖先は天牟羅雲命という。

天正年間に徳川家康の侍医として召し抱えられた。江戸に来てから式部家（本家）、内蔵家、左京家に分かれた。

宝永3年（1706）、左京家の久志本常勝は5代将軍綱吉の病気を治療した功により、武蔵国橘樹郡に800石余の采地を与えられ、従前の下野国都賀郡の知行1,150石を加え、計2千石となった。即ち、久志本家が旗本、医師、神官の3役を兼ね、伊勢神宮のご遷宮の際、将軍家の代参をするという役目柄から、典薬頭の最高知行1,500石をこえた知行となっている。

久志本左京家の墓所は、本堂左手の坂と石段を登ったところにある。まず大きな常倫（常勝の父）の墓に出合う。その左右に一列に計9基の墓碑を数え、旧姓の度会姓と、丸に5ツ葉柏の家紋がほってある。常倫の左に常勝の墓碑があり、その土台に白い輪型の石がひかれている。（写真）

この白い石は徳川綱吉より拝領した庭石であった。また常倫と常勝の間に小さい墓石をみるが、弟子の栗栖元省の墓という。

左京家は常勝が隆盛にした家系で、貞享3年（1686）に奥医師となり左京家をついだ常勝は、将軍綱吉に気に入られその娘の鶴姫の痘瘡や綱吉の病気を治すたびに加増をうけ、殿様となったのである。久志本家の秘方、養中湯、神仙解毒丸については、中西の最近の研究で内容が明らかになった。いずれも胃腸薬である。

左京家は尾張屋清七版『江戸切絵図』（文化2年改板）によれば、甲州街道沿いの諦聴寺隣（渋谷区代々木3丁目24）にあったため、駒岡での診療はしないし常倫寺への墓参も遠のき18世紀には寺とトラブルをおこしている。

久志本常倫の弟、常兼の末裔常人氏（常兼系第12代）は、いま聖マリアンナ医大の皮膚科に勤務している。

都筑区の久志本内蔵家の墓域の項も参照されたい。（P.8）　　［中西淳朗］

綱島霊泉湧出地

市民は忘れ去った？

key.

［　綱島温泉　ラジュウム　湧出史蹟　］

ガイド

港北区樽町２丁目13

東急東横線綱島駅下車、綱島街道を横浜方面へ徒歩５分、ますだや前

綱島駅で下車し東口に出、40mほどで綱島街道へ。そこでは“綱島ラジュウム温泉・東京園”の玄関を見ることができる。本当にラジュウムを含んでいるのか、ということで街道を右折し横浜方面へ行う。駅から２分ほどで鶴見川にかかる大綱橋に至るが、河川敷はかなり広い。

明治時代は堤防がまだなくて河川敷まで桃畑であった。ところが堤防が大正３年（1914）に出来たことで、風景は次第に変化した。

大綱橋南詰のところを樽町というが、そこの住民加藤順造という人が、堤防工事のため家の移転を余儀なくされ新井戸を堀ったところ、飲用できない茶褐色の水が湧出した。昔から赤水が湧く土地と云われているので、風呂用の水としていたところ、持病のリュウマチが治ってしまった。余りにも不思議と思い内務省東京衛生試験所にその水の成分分析を依頼した。

同所々長の長田博士の分析の結果、ラジュウム沃度エマナチオンの含有量が10.47マッヘあり、日本で第３位の良質ラジュウム鉱泉であること判明した。これが契機となって樽町に永明館が大正６年に開館し、続いてびわはた旅館、大綱館が近くに出来た。

この綱島ラジュウム鉱泉を有名にしたのは、大正15年2月の東横線（当時は東京横浜電鉄といった）の開通で、渋谷へも横浜へも出られるようになったばかりか、今の東京園の場所に大衆浴場を電鉄会社が作り、往復キップの購入者には無料で入浴させるというＰＲをしたからである。

大綱橋南詰の、綱島街道と同旧道との分岐点に、樹木におおわれて「ラヂウム霊泉湧出記念碑」がある。（写真）建立は昭和８年（1933）で当時の大西一郎横浜市長の筆になるが、碑文はきざまれていない。

記念すべき井戸は碑から8mほど東の地点にあったが、街道拡張のため埋没されてしまった。

従ってこの碑は、綱島鉱泉を行楽利用からリハビリ利用への転換に眼が向かなかった証として残っているが、市民からも見つめられない存在となりつつある。　　［中西淳朗］

久志本内蔵家の墓域

こちらの方が古い

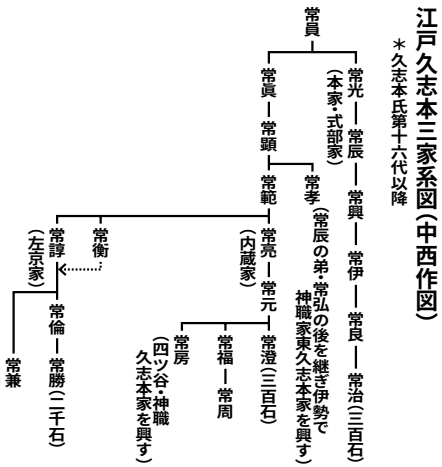
key.

[最乗寺　久志本常範　都筑勝田]

ガイド

都筑区勝田町1277

市営地下鉄仲町台下車、市バス東山田道中坂下方面行５分、勝田消防署前下車３分
所在は勝田山最乗寺本堂うら山



江戸久志本氏のうち、内蔵家というのは内蔵允を名のったことによる。この家は300石といわれているが、幕末には都筑の勝田と牛久保に440石の采地を有している。

久志本氏第16代の常員以降、常光、常辰、常興らは本家（式部家という）らしく、室町時代に医学書十書をかき残し、「神宮医方」を確立したという。

久志本常光の弟、常眞は別家を作り、常顕、常範と続く。この常範に子が３人おり、長男常亮が内蔵家の祖となり、３男常諄が左京家を作る。次男常衡は内蔵家を援助し常亮の代行をよくつとめ、後年財産を弟の常諄にゆずり左京家をたすけるという損な役をつとめた。このような訳で、最乗寺の墓地には、常範、常衡の墓がある。以前は岡の中腹にあったそうだが、昭和59年に頂上近くに移動し、後裔の常雄の新墓が出来た。（家紋は３ツ葉柏）

鶴見駒岡の常倫寺に墓のある左京家の常倫は、伯父常衡の名跡をついだ形でもあったので、葬地ははじめ最乗寺にあった。しかし嗣子常勝が、彼の采地の駒岡に寺をおこし常倫寺と号したので、駒岡に改葬されている。

内蔵家の常亮の孫の常澄は、元禄3年（1690）９月19日に「家業精いれるべき旨、かねて仰出さるといえども、療治の数もすくなき事、不束なるにより」小普請医、即ち無役に落とされ、御番医師にもどるのに６年半もかかっている。この常澄の弟の常福は、兄の死後、跡をつぎ寄合医師までになるという努力をした。また常福の子常周は、安永5年（1776）江戸にきた長崎蘭館医ツュンベリーに面会している。

多分西洋の薬用植物の話を尋ねたものと考えられる。

最乗寺近くの関家は、この一帯が内蔵家の采地であった時代に名主をつとめた家である。

関家住宅は国の重要文化財に指定されている。

なお、鶴見の久志本左京家の墓域の項も参照して下さい。（P.6）

（註）御番医師は営中宿直を担当する。寄合医師は格式ある医師の中から予備医員となったものを指し一種の名誉職。　　［中西淳朗］

都筑の丘の医師たち

研究心強い地域の医師

key.

[多くの良道　文芸交流　地域の医師]

ガイド

医師たちが関係したと考えられる緑区内の寺々。

大林寺　長津田６－６－24（河原玄済）
旧城寺　三保町榎下城跡　（苅谷世英）
観護寺　小山町677－９　（佐藤文成）
瑞雲寺　川和町1593　（前田藤作）

江戸時代では、川崎、鶴見、港北、神奈川、保土ヶ谷地区が橘樹郡で、町田、長津田、中山、小机、港北ニュータウン地区等が都筑郡であった。いずれも武蔵国である。

旧都筑郡には次の良道がとおっている。

①大山街道（赤坂見附から大山へ。いまの国道246に当たる）　②中原街道（武蔵小杉から平塚へ）　③神奈川道（神奈川湊から八王子へ）　④鎌倉道中の道（鎌倉から川和をへて府中へ）

この様に昔から交通の便が良いことにより、幕末には俳諧師・太白堂孤月が大山街道を中心とした仲間作りをはじめ、長津田、麻生、恩田等に連中が生まれ、医師も参加するようになった。

一方、佐藤文成が嘉永年間に神奈川へ転居し、三宝寺の弁玉和尚の和歌会に参加し、河原玄済も投稿するようになった。

旧都筑郡はほとんど無医地区であったが、豊かな農家の中から地域の医師が生まれてきた。彼らの多くが江戸で医学を修めた点に注目したい。

どのような先生についたか列記する。

河原玄済は中川證元、佐藤文成は高井元益、吉村道伯・玄磧（石川村）は千田法眼、岡本玄治・玄知、横山三省（荏田村）は外科を熱田祐菴、内科を浅田宗伯に学んでいる。

ただ一人、苅谷世英だけは米医ヘボンの下に馬で通って学んだと伝えられている。この医師は高座や愛甲の方へも往診したし、種痘医であった。また川和の前田道兄、藤作の2人は瑞雲寺近くに住み（写真）、藤作は都筑医学講習所の設立に努力したらしい。藤作の息子と考えられる収治は、都筑郡医師会の初期幹事をつとめ、後日、橘樹都筑郡医師会の副会長となった。この前田家は外科で幕末（道兄の頃）、土生玄磧の眼科書の共同学習会を行ったらしい記録もある。それほどこの頃に登場する医師達は、文芸、医術等を通じて融和していたのである。　［中西淳朗］

川和の医学講習所

郊外唯一の講習所

key.

［　横浜毎日新聞　東照寺　都筑郡の医師　］

ガイド

緑区川和町1593 瑞雲寺北隣

JR横浜線中山駅下車、北口より市バス川和町方面行10分、瑞雲寺前下車２分

横浜市医師会が昭和16年11月に発刊した『横浜市医師会史』をひもとくと、付記として“都筑郡医師協和会”という会を作ったとある。しかし、それ以前の記事はない。

ところが『横浜緑区史』が平成５年に発刊されて次々と新事実が判明した。

①横浜毎日新聞（明治12年３月11日号）

都筑郡医学講習所は既に願済に相成り毎金曜日を以て会日と定められ即ち去る７日を以て第１会を開かれたりと。

②『都田村誌』(現都筑区の南半分に当たる地域を都田村といった。昭和４年に発刊)

明治11、12年頃川和東照寺内（写真左隣り）に医学校を設けられし事あり、当時は漢方医のみにて医事は進まず。隅々郡内の医師にて足立龔平、苅谷世英、前田藤作、横山三省、中山蔵之の諸氏毎週１回此学校にて研究すること2、3年全く医学研究の本郡に於ける濫觴である。

③横浜毎日新聞（明治14年５月４日号）

神奈川県下川和の医師足立龔平氏外十数名の発起にて去12年中同地に医学講習所を設立（中略)、爾来益々勉励せしかバ此程生徒ハ孰ずれも科を卒へ進んで（中略)、今度此学を講明するに必要なる骸骨の類を購入して愈々盛んにする見込なりと云う。

④『横浜市医師会史・昭和16年』の栗原清一氏の覚え書によると、明治11年秋、横浜医学講習所の設立に向け発起人会でき、近藤良薫、宮島義信、浅水会曄ら７名幹事となり、同12年、横浜医学講習所設立され、翌年生糸検査所で十全病院の二宮忠周氏を講師に勉強している。しかし明治13年に至って会員の親和を欠いて、10月に講習所を廃止し、横浜懇親医会へと看板をぬりかえた。

⑤『横浜緑区史』によれば、上の様な横浜の動向に同調して“都筑郡医師協和会”が設立され、明治44年に、横浜市医師会の設立に伴ない、都筑郡医師会が設立された。

（註）東照寺は瑞雲寺の末寺で、瑞雲寺の北隣にあったが、後に廃寺となり今はない。惜しい限りである。上述の如き医史をもつ地域は横浜市内に緑区だけである。

［中西淳朗］

種痘處門札

ヘボン先生伝来か？

key.

[　苅谷世英　ヘボン　種痘医　]

ガイド

緑区三保町２－238

非公開

昭和58年5月21・22の両日、横浜で第84回日本医史学会総会（会長・大滝紀雄）が開かれた。この時、会場で付随して小展示会も開かれ、苅谷家の種痘處門札も展示された。

門札は、墨が部分的に落ち写真うつりが悪いのが残念である。大きさは縦64、横16、厚さ2.7㎝で、重さは1.5㎏。上部に右書きで免許とあり、その下にVaccinationとかかれ、その下部に“種痘處”と大書きされ、左辺に苅谷世英と署名されている。世英は現当主の苅谷英郎氏の曽祖父に当たり、馬にのって神奈川湊の米医ヘボンの下に種痘の勉強に行ったと伝えられている。

わが国が明治時代に入って、医師に資格を必要としたはじまりが、明治４年の種痘医の免許制である。当初は大学東校（東大医学部の前身）が免許をだしたが、これでは地方が困るというので、翌５年からは各県で認定した。しかし政府は明治８年から医師開業試験を施行したので、種痘医制は翌９年に廃止された。

従って、苅谷の種痘處門札は、明治５年から９年までの間に作られたと考えられる。明治政府が半強制的な集団種痘の行政を打ちだしたのは明治３年で、まず横浜から行われた。（現在の緑区は、当時、横浜郊外郡部である。）

郷土史家の相沢雅雄氏によれば、苅谷家の祖先は三河国刈屋生まれで、定広という人が徳川家康に武将として仕え、天正18年（1590）の小田原攻めの際に負傷して、帰国できなくなり久保村（現三保町）の佐藤小左衛門家に寄寓し、そのまま帰農した〔享保12年（1729）の苅谷喜左衛門定政が書き残した「先祖書」による〕という。正徳の頃（18世紀初頭）、名主であった定政は、お抱え医師をもっていた。その医師の法名を「雪天医白居士」という。

しかし、現在の医家苅谷家は、上述の話との関連は不明であるが、文化年間（19世紀初頭）から医家となり、以来７代続いている名医家である。　［中西淳朗］

影 向 石

眼病に霊験あらたか

key.

[影向寺　眼病平癒　塔礎石]

ガイド

川崎市宮前区野川419

JR南部線武蔵小杉駅前から東急バス道中坂下行き、あるいは野川台公園行き、または川崎市営バス鷺沼行きに乗って「影向寺」下車徒歩10分

川崎市宮前区野川の高台に医王山影向寺（ようごうじ）という古刹がある。この寺の縁起によると、聖武天皇の妃光明皇后が重い病いに伏したおり、薬師如来にその平癒を祈願したところ、ある日武蔵国橘樹郡橘樹郷に霊験あらたかな霊石があり、ここに一寺をひらいて薬師如来をまつれば病いも平癒するであろうとの夢のお告げがあった。そこで天皇は高僧行基に命じてこの地に薬師如来の像をまつらせたところ皇后の病いはたちどころに全快した。寺の創建は天平12年（740）11月のことであるという。

近年の発掘調査の結果、奈良時代と推定される大型の掘立柱建物跡・瓦塔片・塔の基壇などが確認され、さらに出土した古瓦の様式から、創建年代は白鳳時代末期（７世紀末）まで遡ることが確実になった。

江戸時代、この寺は「稲毛薬師堂」としてきこえており、『江戸名所図絵』にもみえる。現存する五間四方の薬師堂と影向石の図が描かれているのは、さすがこの書物の写実性を如実にしめしているといえよう。この薬師堂は昭和52年に、神奈川県重要文化財に指定された。

薬師如来像は欅の一木造りの坐像で、慈覚大師の作とつたえられているが、実は12世紀前半の作である。この薬師如来坐像と両脇侍菩薩立像の三尊像は、明治33年に国の重要文化財に指定されている。

「影向石」は以前は薬師堂の前庭にあったが、現在では山門の右側にすえられている大石である。これはおそらく塔の礎石として用いられていたものであろう。いつの頃か火災にあって塔はうしなわれ、その心柱の凹みにたたえられた水が霊水として眼病に効果があると信じられ、近年までこの霊水をもとめておおくの人が参詣に訪れていた。その信仰を裏付けるように、薬師堂には数多くの「め」の字をあしらった絵馬がかかっているが、現今は合格祈願の新しい絵馬が多くみられ、霊水をもとめる参詣の人もたえてしまったという。

［深瀬泰旦］

長 安 寺

杉田玄白の遠祖の寺

key.

[杉田玄白　間宮氏 「玉川紀行」]

ガイド

川崎市宮前区菅生４－３－11

小田急電鉄向ヶ丘遊園駅から小田急バスあざみの駅行きに乗って「蔵敷」下車徒歩１分

わが国オランダ医学の始祖、杉田玄白の先祖にあたる間宮主水次郎長安（1524－1612）は武蔵国久良岐郡杉田村（現在の横浜市磯子区杉田町）の生まれである。小田原の北条氏康につかえて度々の合戦に勲功をあげていたが、後北条氏滅亡の後は諸国を転々としたのち、文禄３年（1594）に旧領の杉田村にかえりすんで、このころ姓を杉田氏とあらためた。

その後橘樹郡稲毛領にうつり、慶長17年（1612）に89歳の高齢でこの地において没した。生前一寺をひらいて、自らの名を冠して法林山長安寺とし、没後この寺に葬られた。

杉田長安の孫忠安には二児があり、長子は伝左衛門といい、その後裔はこの地において連綿としてさかえている。一方次子の東は甫仙（初代）と名のって医師となり、故郷をはなれて江戸にでた。この甫仙こそ玄白の祖父にあたる。

玄白の孫にあたる成卿（玄白の子立卿の子）は、オランダ語に堪能な眼科医であった。その成卿が安政４年（1857）７月に長安寺に参詣したおりのオランダ語紀行文「玉川紀行」が今につたえられている。

> 溝の口村を過ぎて蔵敷村まで行くと、景色はまた別となる。屡変化する丘と谷の具合は、深く入った山の景色を想わせるものがある。……恰かも降りはじめた雨の中を、長安寺についたのは凡そ十時頃であった。その後の高い叢林の蔭に深く苔むした石の墓が立ってゐた。それが曽って私の父からきいてゐた私達の遠祖の墓である（緒方富雄訳による）。

成卿が「遠祖の墓」とよんだ長安の墓は、本堂の裏手にある墓地の一隅にたっている。正面には「法林院殿釈浄安大比丘」の戒名が刻まれており、左側面には「杉田生　俗名　杉田門殿次郎長安」と刻されている。（写真下）

［深瀬泰旦］

瓢 箪 碑

風流人羽佐間宗玄

key.

[施茶翁　川崎大師 『老婆心書』]

ガイド

川崎市川崎区大師町４－48

京浜急行大師線「川崎大師」駅下車徒歩８分

川崎大師平間寺の五重塔の裏手に、ヒョウタン形をした碑がある。二つのヒョウタンを横にならべ、その上にさらに大きなヒョウタンをおいたこの石碑は、高さが約２メートルとかなり大きい碑であり、表面には「施茶翁塚」と刻し、裏面には「地獄いや極楽とても望み無し　又六道の辻で施茶翁」との歌が刻まれている。

施茶翁とは上州館林藩主松平右近将監武厚の侍医羽左間宗玄である。東海道品川宿と川崎宿の中間に東大森村がある。この村のある茶店の離座敷の壁に極彩色の百鬼夜行の図が描かれ、化物屋敷としておおくの見物人をあつめていた。文政13年（1830）のことであり、この化物屋敷の所有者こそ羽左間宗玄である。

文政３年（1820）平間寺第三五世住持隆盛和上は、宝暦年間に建築された本堂の破損が著しく、寺の法要にも不便をきたすので再建の願書を幕府に提出した。時の寺社奉行は松平右近将監であった。

打ち続く凶作や、大工の棟梁の思わぬ死にあって、工事は遅々としてすすまなかったが、14年後の弘法大師一千年の御遠忌にあたる天保５年（1834）に完成し、盛大な落慶大法要がおこなわれた。この本堂は昭和20年（1945）4月15日の空襲によって焼失するまで、ご本尊厄除大師の真影を奉安した玉殿として、庶民の信仰をあつめていた。

宗玄の瓢箪碑は、天保6年（1835）に創建された。本堂落成を祝っての記念碑であることはまちがいない。本堂再建発願の願書を提出した際の寺社奉行であった松平右近将監が、落成時にはすでにその任を離れてはいたものの、その完成を祝って、すでに風流の道に名のとおった侍医である羽左間宗玄の歌碑を建立したのである。

羽左間宗玄は三代賀川玄悦の門人であると、自らの著書『老婆心書』にしるしているが、『賀川家門籍』にはその名はない。『老婆心書』は文化14年（1817）の板行で、漢字仮名混じり文でかかれている。妊娠、出産にはじまり、急慢驚風、解顱、痘瘡にいたるまでその範囲は広く、その論説は古今の諸家の医説を折衷している。宗玄にはほかに医の道をといた『為己執記』（文政９年刊）がある。　［深瀬泰旦］